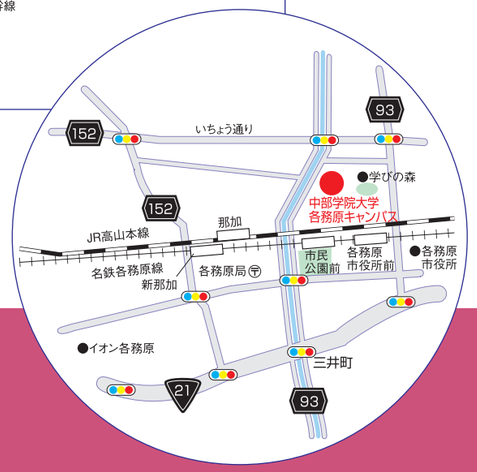
中部学院大学大学院　交通案内



中部学院大学大学院
人間福祉学研究科

〈関キャンパス〉〒501-3993　岐阜県関市桐ヶ丘2-1
TEL 0575-24-2211（代）　FAX 0575-24-0077
〈各務原キャンパス〉〒504-0837　岐阜県各務原市那加甥田町30-1
TEL 058-375-3600（代）　FAX 058-375-3604

E-mail　nyushi@chubu-gu.ac.jp　URL　https://www.chubu-gu.ac.jp

Chubu Gakuin

2025

中部学院大学大学院

21世紀の共生社会の創造は、人間福祉から始まる

人間福祉学研究科
Graduate School of Human Well-Being

人間福祉学専攻

［修士課程］
Master Course of Human Well-Being

［博士課程（後期）］
Doctoral Course of Human Well-Being

人間福祉学研究科について

ごあいさつ

研究科長　藤岡 孝志

本学大学院は、2001年度に、修士課程が設置され、多くの実践的研究者及び研究のできる実践者を輩出してきました。また、さらに、博士課程（後期）が2003年度に設置され、これまで多様な研究領域を牽引する研究者を育成してきました。

本学大学院の特徴は、「人間福祉学」を学位修得の中核に据えていることです。社会福祉学をその基盤におきつつ、その学問体系を受け継ぎながら、人間を中核に据えた人間福祉学の学問構築に大きな特徴があります。人々にとっての「幸せ」とは何でしょうか。将来にわたって不安なく暮らせる仕組みは果たしてどのように実現していくのでしょうか。人々の日々の生活の中にある「つらさ・きつさ」にしっかり向き合い、その中で見えてくる解決の方向性（希望や光）を学問として構築していく。このような人間福祉学研究者の育成が本学大学院の使命であると考えています。

人々の生活と一人ひとりの生涯発達に眼差しを向け、社会との関わりのなかで生み出される人々の苦しみや悲しみ、つらさに丁寧に寄り添い、その中からこそ導き出される様々な課題や問題意識に対して、修得した科学的方法論をもって真摯に向き合っていくことができる研究者の養成を目指しています。多くの研究者志望の方々が本学大学院に集い、実践現場における課題について、そしてそれに向き合う研究について大いに語り合い、互いに研鑽しあえる場が、皆さんと共に構築できることを心から願っています。

●アドミッションポリシー「入学者受け入れの方針」

修士課程	博士課程（後期）
1.社会福祉学やその近接領域に関する基礎的な知識を持ち、現代社会における社会福祉を取り巻く問題・課題に対して、専門的な思考力・実践力、応用力を身に付けることに対し、強い意欲を持った人。 2.福祉、教育、行政、保健、医療等の実践現場で得た経験、知識、技術から社会福祉及び関係領域の理論、実践等の専門知識と技術を、より一層深めることに対し、強い意欲を持った人。	社会福祉学やその近接領域に関する専門的な知識を持ち、現代社会における社会福祉が抱える問題点に対する自立した研究力と、研究・教育場面や実践現場における問題対応力・指導力を身に付けることに対し、強い意欲を持った人。

修士課程

修士課程では、研究者としての基礎的能力と専門知識を身に付け、博士課程に進学する人材を養成するとともに、福祉分野において理論と実践および創造力との調和のとれた高度な専門職業人の養成を行い、社会的要請に応えることのできる人材育成をめざします。

さらに、修士課程の特色として、次の点が挙げられます。

1）一般人試の他に、社会人入試および本学の学部からの進学希望者には、学内選抜入試の制度を設けています。

2）社会人に対しては、門戸を広く開き、社会人入試制度を用意しています。社会人の学びやすい条件を考慮して、カリキュラムの時間割を昼夜開講に拡充し、講義の開講場所も科目によっては岐阜駅からの交通を考慮した各務原キャンパスに設けるなど、学びやすい環境を整えています。また、同額の授業料で3年かけて修学できる制度及び特に優れた研究業績を上げた場合には、1年以上在学すれば修了できる制度を用意しています。

3）本学研究科では、時代の要請に応えうる人材養成をめざします。また、諸科学の連携と協働を含む学際的かつ総合的アプローチの必要性から、社会福祉系学部の卒業生を対象にするだけでなく、他分野からの卒業生を積極的に受け入れています。そのために、人間福祉学部の聴講を可能にし、基礎科目を重視しています。その上で、人間福祉学特講科目を選べるようにしています。

博士課程（後期）

博士課程（後期）においては、修士課程において培った研究能力を基礎として、専門的な研究指導によって学識と識見を深め、人間福祉学の専門研究者として自立して研究を進めることができる能力を養います。そして、将来において人間福祉学研究・教育の中心的担い手となることが期待できる人材を育成するとともに、人間福祉の現場において人間福祉学を基礎とする高度な研究・開発能力、指導力を備えた専門家として、関連諸領域の専門職者と協働して活躍できる人材の養成をめざしています。なお、「特に優れた研究業績を上げた者の在籍期間は、博士課程に1年以上在学すれば足りるものとする」という制度も用意しています。

●ディプロマポリシー「学位授与の方針」

修士課程

建学の精神のもとに、所定の単位を修得し、かつ研究指導を受けた上で修士論文を提出し、修士論文審査および最終試験に合格した者に修士（人間福祉学）の学位を授与します。

本課程の修了生は、現代社会における社会福祉を取り巻く問題・課題について、実践者・研究者として、専門的な思考力・実践力、応用力を身に付けた人、また社会福祉及び関係領域の理論、実践等の専門知識と技術を深めた人です。

博士課程（後期）

建学の精神のもとに、所定の単位を修得し、かつ研究指導を受けた上で課程博士論文を提出し、課程博士論文審査および最終試験に合格した者に博士（人間福祉）の学位を授与します。

本課程の修了生は、現代社会における社会福祉を取り巻く問題・課題について、自立して研究できる能力を身に付けた人です。また、研究・教育職としてあるいは実践現場の指導者として、問題対応力・指導力を身に付けた人です。

多様な学生

本研究科の入試は、一般入試、社会人入試、学内選抜入試など多様なために、学部卒業直後の人、社会人として様々な職業を経験してきた人、社会人で本学通信教育課程を卒業した人、専業主婦などが在籍しています。年齢も20歳代から70歳代と様々です。また、海外からの留学生もいます。

多様な学歴と豊かな経験を持つ院生が、それぞれの意欲、能力、知識など長所を生かし、研究交流を通して切磋琢磨すれば、有意義な学習・研究の展開が可能です。

大学院での学び

修士課程　東倉 一代 さん

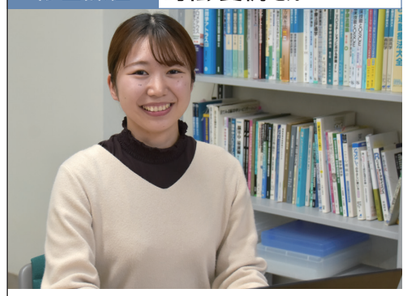
研究内容

大学の看護科を卒業後、総合病院で病棟看護師として働く中、認知症高齢者と関わる機会が多く、ケアの困難さを感じる場面が多かったことから、認知症高齢者のケアに関することに興味を持ちました。認知症高齢者は通常の高齢者と比べて新しい環境への適応に時間がかかると言われています。通常でも新しい環境での生活は不安を伴います。しかし、認知症の状態では記憶障害や見当識障害などの症状によって、より環境に適応しづらい状態であることから、施設間の情報共有によるケアの継続が重要となります。そこで、今回私は認知症高齢者の新たな環境への早期適応とケアを提供する側の困難さの緩和に向けて必要な情報を明らかにし、認知症高齢者用の看護サマリーの考案と評価を行うことを目的に研究を進めています。

大学院での学び

現在、当大学で教員として勤務しており、介護福祉士を目指す学生たちと関わりながら、大学院で学んでいます。大学院での授業はZoomやTeamsを使用し、都合に合わせて自宅にてオンラインで行っていただけたり、開いている時間に学内で実施していただけたりするので、時間を有効に使い学ぶことができています。これまで、福祉に関することは医療分野からの視点で考えることが多かったですが、様々な分野の先生方の研究活動をうかがったり、自分の研究に関して助言や指導をしていただいたりするなかで視野を広げ、今後の研究活動に活かしていきたいと考えています。まだ研究活動は始まったばかりですが、研究指導を担当して下さる先生が、考え方や進め方を丁寧に指導して下さるので、安心して研究活動を行うことができています。

修士課程　時松 愛帆 さん



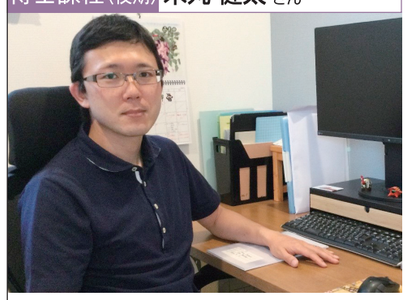
研究内容

大学卒業後、理学療法士として病院や施設等で高齢者と関わる中で、リハビリテーションに積極的で回復が比較的早い方は、若い頃から体を動かすことが好きで、運動習慣がある方が多いと感じていました。その後、本大学の理学療法学科で勤務し学生と接する中で、高齢者に対する介護予防や転倒予防も重要であるが、高齢者に対する取り組みだけで本当に良いのかと疑問を持ちました。大学生（20代）は、筋肉量や骨密度等の様々な身体機能がピークを迎える時期です。将来のサルコペニアリスクを減少させる要因として、高い位置にピークを持っていくことが大切であると言われています。しかし、大学生は生活習慣が乱れやすい時期との指摘があり、身体活動量低下や食習慣の乱れ等から、高いピーク値を確保できないことが考えられました。そこで、本大学の学生を対象として身体活動や生活習慣、身体機能等の現状を把握し、今後の介入方法を検討する際の知見を得ることを目的に、研究を進めています。そして、研究参加者の結果をフィードバックし、研究参加者自身の健康へ繋げていくことが出来たらと思っています。

大学院での学び

本大学院には、様々な専門分野の先生方が在籍されているため、様々な分野の知識を学ぶことができ、広い視野で物事を捉えることができるため、自分の研究にも多くのことを取り入れることができています。私は研究自体が初めてであり、研究デザインや研究計画の立て方、統計等、基本的な部分から学ぶ必要がありました。しかし、それらの内容を先生方の研究を例として講義してくださり、時には参考となる書籍や文献等の紹介もしてくださるなど、研究者として成長していける環境です。そのため、研究初心者ですが安心して取り組むことができています。

博士課程（後期）米丸 健太 さん



研究内容

アスリートは、競技生活のなかで、「突然、今までできていた動作ができなくなった」、「思うように身体が動かなくなってしまった」などといった「動きの不調」を体験することがあります。こうした「動きの不調」は、焦りや抑うつ、自信の低下などといった心理的問題を生じさせるだけでなく、その発症や経過に不安や葛藤などの心理的問題が関わっていると指摘されています（鈴木、2014）。アスリートは、こうした「動きの不調」を改善・克服するための取り組みを通して、どのように成長・発達していくのか。こうした疑問を基に、私はスポーツ心理学の立場から、「動きの不調」を体験したアスリートの心理的側面の変容過程について、面接調査や心理相談事例の分析を行っています。スポーツ心理学とは、スポーツに関わる課題を心理学的側面から明らかにしようとする学問領域です。本研究を通して、アスリートの「動きの不調」を単に身体に関わる問題と捉えるのではなく、心理学的側面から理解することで、「動きの不調」に悩み苦しむアスリートの心理支援に有用な示唆を得ることを目指しています。

大学院での学び

私は、仕事をしながら本大学院の学生として研究を行っていますが、本大学院では、授業や研究指導の時間を仕事に合わせて調整していただけるため、仕事と研究を両立することができています。また、本大学院には、人間福祉学に関わる様々な専門分野の先生方が在籍されているため、授業や研究会を通じて、自分自身の専門分野以外の先生方からも指導や助言を受けることができます。そのことにより、自分自身の研究を多角的に見つめ直すことができています。さらに、研究を進めていくにあたって必要な事務手続き等について、教務課をはじめ事務の方々が丁寧にサポートしてくださっています。このような環境が整っているため、私は安心して研究に取り組むことができています。

大学院担当教員の紹介

有川 一（ありかわ はじめ）
専門分野：スポーツ医科学／運動生理学

健康の維持･増進に向けた様々な身体活動の考案･構築･展開を目指し、スポーツ医科学･運動生理学の分野から、個々の身体活動の生理学的特徴や効果を明らかにするための研究活動を行っている。特に運動以外の場面で用いられている様々な手法を運動実施時に適用し、その効果の有無を検証している。

大森 正英（おおもり まさひで）
専門分野：公衆衛生学、栄養生理学／音楽療法

超高齢社会と言われる現在、日本の未来が真っ暗であるかのような悲観論が横行している。実際は高齢者の7割以上が「元気な高齢者」で体力、各種疾病受療率、平均余命、外見など、ほぼ全ての面で「若返り」か進行中なのであるが、暗い面ばかりを強調する報道姿勢の影響で、これらの重大な事実が知らされていないのは誠に嘆かわしいと思いながら研究活動を続けている。

大藪 元康（おおやぶ もとやす）
専門分野：社会福祉学　特に「社会福祉財政」「社会福祉計画」

社会福祉基礎構造改革以降、社会福祉のサービスはより一般的になったといえる。しかし、そのサービスを提供するための財源には大きな課題がある。また、社会福祉サービスにも「経営」の視点が入り、サービス提供によって利潤を得ることがあたりまえになってきている。この状況の中で、社会福祉とは何なのかを整理し、「人間福祉」とはどのような状況を実現することなのかを提起していくことが必要であると考えている。

小山 晶子（おやま あきこ）
専門分野：専門職連携、福祉施設の人材マネジメント、諸外国の医療福祉専門職の役割

自身の実践から高齢者福祉施設における看護師の役割の明確化をきっかけに研究を開始し、専門職連携（IPW）、専門職連携教育（IPE）、福祉施設の人材マネジメント、諸外国の専門職の役割に研究の軸を置いてきた。近年は、日本の喫緊の課題である介護人材の確保･外国人介護人材の諸問題を厚生労働省の関連委員会の委員として取り組み、研究も行う。海外調査（イギリス･フランス･ベトナム）も実施し研究に活かしている。

堅田 明義（かただ あきよし）
専門分野：心理学、神経生理学、障がい科学

知的障害に関する教育実践･臨床や教育心理学的研究からスタートし、脳活動の電気生理学的研究を長年継続し、結果的に境界領域的研究の範ちゅうになるが、発達･加齢の生理心理学･精神生理学的研究を重視している。研究対象は視覚、聴覚、知的、重症心身、発達の各障がいや認知症など多様であるが、発達科学や障がい科学をフィールドとしている。

佐甲 学（さこう まなぶ）
専門分野：地域福祉論

地域福祉の研究領域は幅広いが、その中核は、地域生活課題の解決と予防をめざす、住民や当事者が主体となる地域福祉実践及び福祉コミュニティ形成と地域づくりだと捉えています。前職（全国社会福祉協議会）の実務経験をいかし、社協活動、民生･児童委員活動、地域福祉･包括的支援の施策と地域福祉計画、災害ソーシャルワーク、住民福祉活動、方法（コミュニティワーク等）などについて、実践との関わりを心がけ、探求しています。

鈴木 壯（すずき まさし）
専門分野：スポーツ心理学／臨床心理学

スポーツ心理学と臨床心理学が重なる領域に関心があり、「こころとからだ」をキーワードに、主に相談事例を通じて、実践と研究を行ってきた。アスリートの心理支援の理論と方法、アスリートの生きる世界の心理学的特異性、身体症状や身体表現の深層心理学的な意味、などについて、主として心理力動的立場から探求を続けている。

高木 総平（たかき そうへい）
専門分野：宗教心理学／臨床心理学

宗教と臨床心理学に跨る領域を実践的に研究しています。これまで取り組んできたテーマは、「カルト組織」からの脱会支援や予防に関するものです。キリスト教界の課題にも取り組んでいます。長年の「いのちの電話」の役員や委員の経験から、「自死（自殺）予防」についても実践的に取り組んでいます。「死の教育」にも大きな関心を持っています。

千鳥 司浩（ちどり かずひろ）
専門分野：予防理学療法学／神経理学療法学

認知機能と運動制御機能の密接な繋がりとその学習過程の視点から、運動機能回復を支援するリハビリテーションを目指す研究をしています。これまでは、高齢者の転倒予防に関する研究や自治体と協力したフィールド調査から高齢者の健康維持増進のための効果的な方法について検討してきました。また新たな取り組みとして体性感覚機能を増強するための介入方法として、確率共鳴現象を利用した振動刺激の開発や認知機能の活性化による介入方法について検討しています。正解のない問いに向き合っていく院生を希望します。

名倉 弘美（なぐら ひろみ）
専門分野：介護福祉

医療と介護の実践現場の経験を踏まえ、高齢者介護および認知症ケアについて関心を持ち探求している。介護実践の現状、他職種との関係性、介護保険、地域共生等についても理解を深め、利用者ニーズに応えるためのケアについて検討している。

林 美里（はやし みさと）
専門分野：比較認知発達

ヒトの子どもと、チンパンジーやオランウータンなどの大型類人猿の認知発達について、物操作を共通の尺度とした種間比較の視点から研究してきた。ヒトの言語につながる操作の階層性の分析や、野生大型類人猿を含む道具使用行動の発達研究に加えて、障がいをもったチンパンジーを対象とした研究や、認知発達の基盤となる母子関係についても研究している。

藤岡 孝志（ふじおか たかし）
専門分野：子ども家庭福祉学／支援者支援学

子ども虐待、不登校、いじめ、発達障害、非行、国際比較と多様な領域を通して、子ども家庭福祉について考え、実践をしてきた。また、共感疲労、心的外傷後成長、感情労働、バーンアウト等、支援者への支援についても実践と研究を行なってきた。子ども(親)支援の安定した質の保持のためには、支援者自身が傷つき等から回復し、安定した存在性を保つことが求められている。これらを踏まえた支援者支援学の構築に取り組んでいる。

福地 潮人（ふくち しおと）
専門分野：比較福祉社会論、政治社会学／社会保障論、市民社会論

現代アソシエーション論を理論的基軸に、現代福祉国家と市民社会間の関係の変化を分析している。その際にとくにアソシエーションに備わっているサービスと「声」の機能的相違に着目している。近年では、スウェーデンをフィールドに、各種の労働統合型社会的企業や障害者団体、高齢者団体、移民保護団体などと、関連する政府･自治体関係者にインタビューを試み、福祉大国の社会保障･社会福祉政策をめぐるガバナンスに生じている変化を把握しようと努めている。

別府 悦子（べっぷ えつこ）
専門分野：障害者心理学／特別ニーズ教育

特別支援教育および臨床発達心理を専門とし、おもに現場へのコンサルテーションや発達相談を行いながら、発達障害など支援が必要な事例や実践を臨床的に研究することに取り組んでいる。また、障害の早期発見や実践のアセスメントについて、自治体や関係機関との連携を行ないながら、現場に還元できる研究を目指している。

三上 章允（みかみ あきちか）
専門分野：脳生理学／脳神経科学

高次脳機能障害の診断･評価･治療、および、その基礎となる大脳皮質連合野の機能、認知症の予防･早期発見･評価･ケア、方向転換時のバランス制御と転倒予防、日本および東アジアにおける終末期ケア、脳の発達と進化、色覚の進化、瞑想･音楽活動･音楽療法における脳活動の研究などに取り組んでいる。

三川 浩太郎（みかわ こうたろう）
専門分野：運動生理学／呼吸･心臓リハビリテーション／サルコペニア

近年、より効果的なリハビリテーション方法の開発やエビデンスの構築が求められています。そこで、運動生理学的な視点に基づき、若年者や高齢者の生理機能（体組成･身体活動量･呼吸循環反応･酸素摂取量など）を測定･分析し、サルコペニアやフレイルの予防、リハビリテーション技術の効果検証に関する「基礎研究」を行います。そして,呼吸器や循環器に障害を抱えている方を対象としたリハビリテーション方法の開発に関する「臨床研究」も行います。

水野 友有（みずの ゆう）
専門分野：発達心理学、赤ちゃん学、特別支援教育

「『人間らしさ』に着目した重度障がい児の全人的発達評価の開発」をテーマに、行動学的･生理学的手法による発達のプロファイルに取り組む。また、障がいのある人たちの存在こそが他者の思考や価値観の変革を支えると考え、人類学的手法を導入し、障がいのある人たちの表出･表現（=アート）を通した社会実験に取り組んでいる。「障がい児･者の研究」ではなく、「障がい児･者と研究する」ことを重視する。

宮嶋 淳（みやじま じゅん）
専門分野：福祉社会デザイン研究、ソーシャルワーク、福祉人材開発

福祉社会とは「誰もが生まれてきて良かった」と思える社会だ。そうした社会を創造していくことを福祉社会デザインという。その手法と学問として、私は「ソーシャルワーク」に価値をおき、「ソーシャルワーカーの実践力」に着目する。市民から「期待される」社会の有り様、それを支える人材の養成･教育･開発を、2035年を念頭に置き考えている。

宮田 延子（みやた のぶこ）
専門分野：公衆衛生看護学／家族看護、地域保健活動

地域保健活動を通して、健康増進や疾病予防の看護実践研究を行っている。地域で暮らす人々の、生まれて死に至るまで、より健康な生活の営みに貢献できる看護を模索している。対象者と家族を視野に入れ、看護介入とその効果を見出すものである。高齢者の健康生活習慣と活動能力、中高年健康づくり活動の評価、在宅高齢者の看取りと家族ケア、地域の発達障がい児のケアシステム、認知症高齢者の見守りネットワーク等に取り組んできた。

宮本 正一（みやもと まさかず）
専門分野：心理学／教育心理学

人間関係に興味があり、社会的促進という最も基礎的な対人関係の実験的研究をしてきた。その後、人前であがってしまう、緊張して実力が出せない等の機序に関心を広げる一方、学校場面での人間関係の調査研究を行ってきた。現在は幼稚園を含めた学校現場での発達障がい児の支援にも手を広げている。

横山 さつき（よこやま さつき）
専門分野：介護福祉／産業保健

「認知症や障がいのある方にも介護職にも“心地よい環境づくり”」を目指して、研究をしている。これまでに、「介護職の職業性ストレス」や「認知症高齢者等への各種セラピーの効果」、「介護福祉士養成教育」に関する実践研究に取組んだ。現在は、「介護支援機器･福祉用具の開発･導入」、「介護職員による高齢者虐待防止およびケアハラスメント防止」に向けての研究を、企業や介護事業所の協力のもとに実施している。

研究内容･実績の詳細は下記のHPをご覧ください。

本学HP https://www.chubu-gu.ac.jp/ → 大学院／人間福祉学研究科 → 担当教員

修了まで（カリキュラム）

●カリキュラムポリシー「教育課程編成・実施の方針」

修士課程

社会福祉学及びその関係領域に関する高度な専門知識と見識、その技術を養うため、以下のとおり教育課程を編成します。

1.専門科目

（1）幅広い知識を修めることをねらいとして、社会福祉学を基礎とする領域から周辺領域に関する科目を配置します。また、1年次前期には多彩な研究方法等について理解を深めるため、大学院構成教員によるオムニバス形式の科目を配置します。

（2）論文講読を行い、研究手法や論文の構成を身につけるための科目を配置します。

2. 特別研究指導科目

入学時の研究計画書をもとに、綿密な研究計画の作成について指導をします。修士論文の完成に向け、研究内容に応じた個別的、専門的な指導を1年次から継続的に行います。また、研究中間報告会を開催し、研究の進捗状況について確認を行います。指導教員のみならずその他の隣接領域の研究者から助言を行うことで、論文の完成度の向上を目指し、個別指導の補強を行います。

博士課程（後期）

自立して研究が進められる能力と実践現場での研究・開発・指導能力を養うために、各年次において専門的な研究指導をします。

本人が希望した教員を主担当として配置することを原則に、ミスマッチのない研究指導を開始します。副担当教員の配置により研究指導のみならず円滑な研究活動に必要なサポートを行います。

また、研究中間報告会を開催し、研究の進捗状況について確認を行います。指導教員のみならずその他の隣接領域の研究者から助言を行うことで、論文の完成度の向上を目指し、個別指導の補強を行います。

論文の審査過程には予備審査を設け、複数の教員による十分な審査と指導を行います。

授業と単位

本学はセメスター制を採用しており、4ー9月が前期、10ー3月が後期です。授業の1コマは90分で、講義、演習とも半期2単位、通年4単位です。

毎週の授業のほか、隔週での授業や集中講義、あるいは、それらの組み合わせにより授業を行うこともあります。また、大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例を実施し、昼夜の時間において授業又は研究指導を行うことにより、大学院での履修がしやすくなるよう配慮しています。

修士課程

修士課程の修了に必要な単位数は、必修科目18単位、人間福祉学特講科目から12単位以上、合計30単位以上です。

修士（人間福祉学）の学位取得には、2年以上在学し、上記の修了要件単位の修得を行い、さらに必要な研究指導を受けた上で、修士学位申請論文を提出し、論文審査及び最終試験に合格することが必要です。

科目名・科目区分	単位数	履修方法
人間福祉学総合研究	2単位	必修
人間福祉学特講IA～IH 人間福祉学特講IIA～IIH	12単位	特講科目16科目32単位から12単位以上修得する
人間福祉学研究IA	2単位	必修
人間福祉学研究IB	2単位	必修
人間福祉学研究IIA	2単位	必修
人間福祉学研究IIB	2単位	必修
特別研究指導IA	2単位	必修
特別研究指導IB	2単位	必修
特別研究指導IIA	2単位	必修
特別研究指導IIB	2単位	必修
合　計	30単位	

科目ピックアップ

人間福祉学特講IE
社会福祉実践研究

社会福祉学は、理論と実践の両輪で成り立っている。実践の中で見い出した問題や課題をどう研究の俎上にのせるのか。この講義では、テーマの設定、問題の背景、問題の所在、研究目的、方法の設定、結果の整理、記述、考察と様々な研究テーマを題材にして掘り下げていく。社会福祉実践に関わる事項について、海外・日本の文献を通して理解を深めることを目指す。

人間福祉学特講IF
国際福祉研究

世界経済のグローバル化、そして社会の深刻な少子高齢化が進む今日、既存の先進福祉国家は大きな転換期を迎えている。本講義ではそのような現代福祉国家の現状と変化を国際比較の観点から捉え、その今後について展望する。手順としては、まず70年代以降の現代福祉国家の変容について把握した上で、この変容にあわせて福祉国家論がどのように変化してきたのか検討する。次に福祉国家レジーム論について簡単に触れた上で、各レジームを代表する国々の社会福祉・社会保障政策の特徴と近年の変化について把握する。比較福祉の視点や、福祉国家の史的変遷、各福祉国家類型の特徴について理解し、これらについて説明できることを目指す。

人間福祉学特講IIG
障害児心理学教育研究

これまでの「障害」に関する学びを振り返り、関連図書や論文から現代の「障害」の種類や程度について再確認する。さらに、近年の研究論文を検索し、「障害」の種類別に選定した論文を輪読する。論文紹介のプレゼンテーションを中心に、人間福祉学的の視点から障害児（者）支援について議論し、その課題やあり方について考察することを目的とする。人間福祉学における障害児（者）支援のあり方について考えることを目指す。

博士課程（後期）

博士課程の修了に必要な単位数は、合計16単位です。コースワーク科目を1年次に2科目（4単位）、リサーチワーク科目を各学年2科目（4単位）取得します。

博士（人間福祉学）の学位取得には、原則として3年以上在学し、上記の修了要件単位の取得を行い、かつ必要な研究指導を受けた上で、博士学位申請論文を提出し、予備審査及び本審査に合格することが必要です。

科目名・科目区分	単位数	履修方法
人間福祉学特殊講義A	2単位	必修
人間福祉学特殊講義B	2単位	必修
人間福祉学特殊研究IA	2単位	必修
人間福祉学特殊研究IB	2単位	必修
人間福祉学特殊研究IIA	2単位	必修
人間福祉学特殊研究IIB	2単位	必修
人間福祉学特殊研究IIIA	2単位	必修
人間福祉学特殊研究IIIB	2単位	必修
合　計	16単位	

入試概要

中部学院大学大学院　2025年度入試実施概要

	入試区分	出願期間	試験日	合格発表日	手続締切日	試験会場	選考方法
修士（A日程）	学内選抜	9/2（月）～9/27（金）	10/5（土）	10/11（金）	10/18（金）	本学（関キャンパス）	書類審査、小論文、専門科目、個人面接
	一般						書類審査、小論文、専門科目、英語、個人面接
	社会人※1						書類審査、小論文、個人面接
修士（B日程）	学内選抜	1/14（火）～1/29（水）	2/8（土）	2/14（金）	2/21（金）		書類審査、小論文、専門科目、個人面接
	一般						書類審査、小論文、専門科目、英語、個人面接
	社会人※1						書類審査、小論文、個人面接
博士	学内選抜						書類審査、小論文、個人面接
	一般						書類審査、小論文、英語、個人面接
	社会人※2						書類審査、小論文、個人面接

※1. 修士課程…社会人入試の出願資格は、入学時に3年以上の在職経験もしくは社会的経験を有する方。
※2. 博士課程…社会人入試の出願資格は、出願時に出願資格取得後、企業・学校・官公庁等に研究者、教員等として3年以上の職務経験を有する方。

学費・学費援助（奨学金制度）

学費／年間

	入学金（入学時に1回）	授業料	施設設備資金	教育充実費	演習費	合計
修士課程	200,000円	500,000円	100,000円	100,000円	20,000円	920,000円
博士課程	200,000円	500,000円	100,000円	100,000円	ー	900,000円

上記は2024年4月入学生を対象としたものです。若干の改定が行われることがあります。

本学独自の奨学金制度

種　類	内　容
大学院奨学金	◆対象者／経済的支援が必要で、学業優秀な方　◆給付額／250,000円　◆支給期間／1年間　※2年次以降は別途選考 ◆申込方法／入学願書の応募欄に希望の有無を記入し、出願してください。無記入の場合は、奨学金の希望がないものとみなします。 ◆選考方法／入学試験合格者の中から、奨学金を希望する方を対象に、全ての入試時に選考します。 ◆結果の通知／選考結果は合格通知と併せて通知します。　◆奨学生の基本要件／学生募集要項を参照してください。 ◆入学金免除／中部学院大学から中部学院大学大学院修士課程に入学する場合、又は中部学院大学大学院修士課程から中部学院大学大学院博士課程に入学する場合の入学金は、全額を免除する。

留学生の学費援助については別途ございます。
入試広報課までお問い合わせください。【TEL:0575-24-2213】

学外の奨学金制度

種　類	支給額（月額）
日本学生支援機構奨学金「第一種」【貸与】無利子	修士50,000円・88,000円、博士80,000円・122,000円から選択
日本学生支援機構奨学金「第二種」【貸与】有利子	50,000円～150,000円から選択

◇学力基準／学生課までお問い合わせください。【TEL:0575-24-2214】

サポート体制

学生のニーズや生活スタイルに合わせて柔軟に学びをサポートします。
例. 一部の科目を土・日曜に開講等

○両キャンパス（関・各務原）でも開講
○長期履修制度（3年ないし4年に渡り計画的に授業を履修する制度）
○昼夜の時間において研究指導を実施
○授業形態は、対面を基本としながら、対面とオンライン併用とします。
自宅や職場からのオンライン受講が可能です。